

子どもの認知発達の指標として「うそ」をとらえる

東京学芸大学国際教育センター 教授
松井智子 (まつい ともこ)

Profile—松井智子

1987年、早稲田大学教育学部英語英文学科卒業。1988年、ロンドン大学ユニバーシティカレッジ文学部英文科修士課程修了。1995年、同大学文学部言語学科博士課程修了。博士(言語学)。国際基督教大学、京都大学霊長類研究所を経て、2010年より現職。専門は発達心理学、語用論。著訳書は『子どものうそ、大人の皮肉:ことばのオモテとウラがわかるには』(岩波書店)、『言語と身体性』(共著、岩波書店)、『コミュニケーションの起源を探る』(共訳、勁草書房)など。



子どもにとってのうそは悪いこと？

自分の言いたいことを、子どもが言葉を通して伝えることができるようになり、大人と何かしら「会話」のようなものができるようになるのは3歳くらいからであろう。3歳児は、知識の概念がわかってくる年齢でもある。自分の知識と照らし合わせて、会話の相手が言ったことが正しいか、間違っているかを判断することができる。このころの子どもは、相手が言ったことが間違っていると判断した場合、それを正そうとする欲求も強い。

たとえば3歳児の前に、スプーンを持って「これはフォークだよ」と言ったり、バナナを指して「これはリンゴだよ」と言ったりするような相手がいたとする。相手が明らかに間違ったことを何度も言っていることがわかると、3歳以上の子どもは相手が言うことをそれ以降信用しなくなる。その相手が今度は自分のまだ知らないことを教えてくれたとしても、学習しないという選択をすることがわかっている。このように、3歳くらいから、子どもは他者が間違ったことを何度も言うのを聞いて、その人の信頼性と結びつけることもできるようになる。

うそを理解する際にも、相手が言っていることを自分の知識や現実と照らし合わせて、その信頼性を判断する能力が必要である。ただ、相手の間違いに気づくことと比べると、相手のうそに気づくのははるかに難しい。うそをつく人は、そのことを相手に気づかせまいという意図を持っていて、あたかも自分が信じていること

であるかのようにうそをつく。対照的に、間違ってしまう人は意図して間違えるわけではない。本人は気がつかなくても周囲がその間違いに最初に気がつくということもありうる。話し手が言っていることがうそであることに気づくためには、話し手の意図(聞き手を欺こうという意図を持ってうそをついていること)と信念(自分のついているうそを信じていないこと)を理解することが必要である。話し手の意図や信念を理解する能力は、5歳～8歳くらいまでの間に飛躍的に発達する。コミュニケーションに不可欠なこの能力は、心の理論と呼ばれている社会認知能力を基盤としていていると考えられている。

他人がうそをついていることを子どもがいつ頃から理解できるのかという研究はじつは数少ない。幼児期の子どもは、うそをつかれても、相手が自分をだまそうとしていることが理解できないようだ。相手の言っていることが、自分の知っている事実と異なっていることに気づいても、うそをつかれたとは考えず、単に相手が間違えたかと理解することが多い。この時期は、意図的なうそや冗談など、言われたことが事実と合わない場合は、相手が間違えたかと理解する傾向がある。悪意に基づくうそが理解できるようになるのは、7歳以降である。

ただ、幼児期の子どもは、正しいことと間違っていることを区別するだけでなく、善悪を区別することができる。そしてうそをつくことは悪で、正直にありのままを告げることが善で

あると子どもたちは理解しているようである。普段は相手がうそをつくなど毛頭考えずに会話をしている4歳児も、相手が意地悪だとか悪人だとか聞かされると、相手がうそをつくかもしれないと考えるようになる。幼児期に発達する善悪の概念の理解が、早期のうその理解と密接に関係しているということだろう。

うそを見抜くこと

古くから、うそを見抜く方法についての関心は高い。うそを見抜くための手がかりに関する40年間の研究をまとめた論文によると、言語的なもの、非言語的なものなど合わせて150を超える手がかりがあったそうだ (DePaulo et al., 2003)。ただし、それらの手がかりは目立たないものであることが多く、見落とされることも少なくないようである。

巷では、子どものうそを親が見抜く方法がよく話題になるが、子ども自身が相手のうそを見抜けるかどうかについては、まだわからないことが多い。大人は相手が目をそらすと、それを手がかりに相手がうそをついているかもしれないという判断をすることが知られている。子どもの場合は、6歳から9歳くらいの間にそのような判断ができるようになるという。先に触れたように、幼児はそもそも相手がよほどの悪人でない限り、うそをつかれることを予測していない。そうなると、相手がうそをついていると判断するための手がかりが目前で提示されていたとしても、それに気がつかない可能性は高いのかもしれない。

ただし、これまでの研究から、3歳以上の子どもは、相手が自信のない様子を見せると、その人の言うことを疑ってかかることがわかっている。人は自分の言っていることに自信がないとき、共通して、ある特徴を持った話し方をする。声小さくなったり、話し方がゆっくりになったり、尻上がりになったりするのだ。視線が動いたり、表情や姿勢が変わったりすることもある。うそをつく人も、同じような特徴を持つ話し方をするのがわかっている。

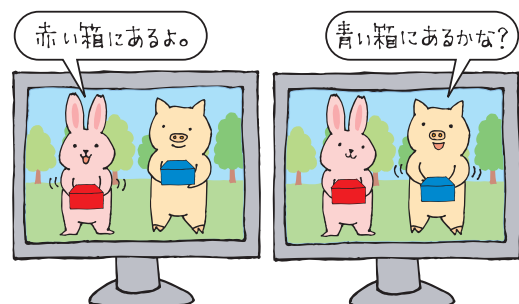
話し手が自分の言っていることにどのくらい

自信を持っているのかを判断できると、その人が何を知っていて、何を知らないかを推測することができる。たとえば、日本語では文末に「よ」という助詞をつけることによって、話し手が強い自信を持って話をしていることを聞き手に伝えることができる。逆に、「かな」という文末助詞を使うことで、自信がないことを伝えることができる。子どもは「よ」や「かな」を使っている話し手の自信の強さをいつ頃から推測することができるのだろうか。

そのことを調べるために、幼児を対象に実験を行ったことがある (Matsui et al., 2006)。パソコンの画面上に二匹の動物が登場し、それぞれが赤い箱と青い箱のどちらに探し物が入っているかを子どもに教えてくれる。だが、二匹の言っていることは矛盾していて、子どもはどちらか一匹の動物が言っていることを信じて箱を選択しなければいけない。二匹の動物が言っていることは自信の度合いでも異なっている。たとえば片方の動物が「赤い箱にあるよ」と言えば、もう片方は「青い箱にあるかな」と言うのである。

実験の結果、「よ」を使う動物と「かな」を使う動物が出てきた場合、3歳児でも「よ」を使った動物の言うことを信じ、「かな」を使った動物の言うことは信じないことがわかった。3歳児にも「よ」と「かな」という言葉が表す話し手の自信の度合いが理解できるということには少し驚いた。というのも、それまでの英語圏を中心とした研究では、一般的に他者の自信の度合いがわかるのは、4歳から5歳の間だとみなされていたからだった。

もちろん日常会話で話し手の自信の度合いが



わかるのは「よ」とか「かな」のような言語表現だけではない。それ以外の代表的なものひとつがイントネーションである。多くの言語において、尻上がりのイントネーションは話し手の自信のなさを、逆に尻下がりのイントネーションは話し手が強い自信を持っていることを示すと考えられている。

子どもは、いつ頃からイントネーションを通して、話し手の自信の強さを理解するのだろうか？このことを調べるために、パソコンの画面に二匹の動物が順に登場し、それぞれ尻上がり、尻下がりのイントネーションを使って、子どもに新しい語彙を教えるという実験を行った (Matsui & Imai, 2015)。二匹の動物はそれぞれ別のものを指してたとえば「トマ」という新奇な語彙を子どもに教えるので、子どもはどちらか一匹の動物の指したものを選んで学習することが期待された。子どもが尻下がりのイントネーションを使っていた動物が指したものを「トマ」と答えた場合、それが正答とみなされた。

実験の結果、3歳児は非常に高い正答率を示した。つまり、尻上がりのイントネーションを使った動物からは語彙を学習しなかったのである。文末助詞「かな」を使った動物のいうことは信じなかったことと合わせて考えてみると、子どもは話し手の自信のなさを見抜く力を早いうちに獲得していると言えそうである。相手の声色や話のスピードなどに注意を向けることができれば、相手が本当のことを言っているか、うそをついているかを見抜くことも子どもにとって不可能ではないのかもしれない。

うそをつくのは難しい

3歳くらいになると、子どもなりに正しいことと、間違ったことを区別し、善いことと悪いことを区別し始めるというのは先に述べたとおりである。親や先生から「してはいけない」と言われたことをしてしまったときに、うそをつくということが始まるのもこのころである。

3歳の子どものつくうそは、自分が「してはいけない」ことをしてしまった事実を、相手から隠すことを目的としている。事実を相手に知

られることによって、自分が受けるかもしれない罰を避けたいという気持ちから始まっていると考えられる。次のような心理実験は、3歳児のつくうその特徴をよく表している (Lewis et al., 1989)。実験者と子どもの前にあるテーブルの上には箱が置いてある。ただし、ふたが閉まっていて箱の中身を見ることはできない。実験者は一時部屋を離れることになり、子どもにとっては中身を見るチャンス到来となるのだが、その直前に子どもは実験者から、「箱の中身を見ないようにね」と言われてしまう。しかし3歳児は我慢ができず、実験者がいない間に箱を開けて中を見る。やがて戻ってきた実験者が「箱の中を見た？」と聞いてみると、子どもは「見てない」と答える。してはいけないことをしてしまったときに、それを隠すためにうそをつくことは3歳児にもできるのである。ただし、まだその後がある。実験者が続けて「箱の中に何が入っていたの？」と聞かれると、3歳児は「クマのぬいぐるみ」と正直に答えてしまうのである。うそをついたことがばれないようにするには、その後もずっと話のつじつまを合わせなければならないが、3歳児にはまだそれはできないのである。「見ていないからわからない」などとつじつまを合わせて答えられるようになるのは、7歳ごろである。このころ、子どもはようやくその概念的な理解ができると考えられている。

ただし、その前段階として、非常に単純なうそであれば、4歳くらいからつくことができるようだ。ラッセルらが実施した「のぞき窓課題」の実験は、他者を欺くことに関して3歳児と4歳児がどう違うかをとらえる実験として広く知られている。最近の実験では、押しボタンがついた色の違う二つの箱が用いられた。ボタンは箱の下にあり、子どもはその箱を使って実験者とボタン押しのゲームをすることになる。二つの箱の片方には子どもの好きなもの、たとえばチョコボールが入っていて、その箱の下にあるボタンを押すと、チョコボールが出てくるという仕掛けだ。ゲームには重要なルールが二つあった。ひとつは、子ども自身はボタンを押

することができず、対戦相手だけが押すことができるというルールである。ただし、対戦相手がどちらの箱を選んでボタンを押すかを決めるのは、子ども自身である。二つ目のルールは、もし対戦相手が選んだ箱にチョコボールが入っていたら、相手に取られてしまうが、もし相手が選んだ箱が空っぽだったら、もうひとつの箱に入っているチョコボールを子どもがもらえるというものだ。

練習段階では、箱の中身は見えないようになっていた。そのため、子どもが相手に選ぶように指示した箱にはチョコボールが入っている場合もあるし、入っていない場合もあった。だが課題の本番では、箱の中身が子どもにだけ見えるようになっていた。つまり、どちらの箱にチョコボールが入っているのか、子どもだけにはわかるようになっていた。自分がチョコボールをもらうためには、対戦相手に空っぽの箱を選ぶように指示を与えなければならない。つまり自分と同じようにチョコボールを欲しがっている対戦相手に、空っぽの箱の下にあるボタンを押すようにうそをつかなければならぬ。

人助けなら、うそをつける

ラッセルたちの「のぞき窓課題」に興味を持ち、私たちも新たなパソコンゲームのような「のぞき窓課題」を作って、3歳から5歳の子どもが相手を欺くことができるかどうかを調査した。ラッセルたちの実験と同じように、相手と競争して箱の中に入っているものをもらうという課題を「自分のためのうそ課題」と名づけて実施したのに加え、「人助けのうそ課題」という新しい課題も試してみた (Matsui & Miura, 2011)。

ラッセルの課題に類似した「自分のためのうそ課題」では、対戦相手は優しい動物で、二つの箱のひとつには果物が入っていた (本物ではないが)。対戦相手に空っぽの箱を開けるように指示を与えることができれば、子どもはその果物ももらって得点することができるというゲームだった。予想通り、3歳児はではほとんど得点することができなかったが、4歳児は、

高得点を取った。

一方「人助けのうそ課題」では、おもしろい結果が得られた。この課題では、箱の中には小さな動物が隠れていた。対戦相手はオオカミやワニという恐ろしい動物だった。実験に参加した子どもには、箱の中にいる小さな動物が、対戦相手のオオカミやワニに見つかることと食べられてしまうことを話しておいた。箱の中身が子どもには見えて、どちらの箱に小さな動物が隠れているかが子どもにわかるときに、小さな動物を助けるために対戦相手を欺くことができるかを調べるのが目的だった。

その結果、興味深いことがわかった。「人助けのうそ課題」のほうでは、3歳児は4歳児とほぼ変わらない出来栄で、7割ほど得点することができたのだ。どうやら3歳児は、自分が欲しいものを得るため、あるいは自分が対戦相手に勝つためにはまだうそをつくことはできないが、人助けの目的がはっきりしている場合には、その目的を達成するためにうそをつくことができる場合があるようだ。3歳児はうそをつくことができない、という定説に一石を投じる結果と言えるのではないだろうか。

文 献

- DePaulo, Bella, M., Lindsay, J. J., Malone, B. E., Muhlenbruck, L., Charlton, K. & Cooper, H. (2003) Cues to deception. *Psychological Bulletin*, 129, 74-118.
- Lewis, M., Stranger, C. & Sullivan, M. W. (1989) Deception in 3-year-olds. *Developmental Psychology*, 25, 439-443.
- Matsui, T. & Imai, M. (2015) Autistic children prefer to learn a new word from a confident speaker. Poster presentation at the 2015 Biennial Meeting of Society for Research in Child Development.
- Matsui, T. & Miura, Y. (2011) Three-year-olds are capable of deceiving others in the pro-social context but not in the manipulative context. Poster presentation at the 2011 Biennial Meeting of Society for Research in Child Development.
- Matsui, T., Yamamoto, T. & McCagg, P. (2006) On the role of language in children's early understanding of others as epistemic beings. *Cognitive Development*, 21, 158-173.